

2026年5月3日（復活節第5主日、A年）

メッセージ

「業を行う者とされている」

（ヨハネによる福音書14: 1-14）

司祭ヨセフ太田信三

今日の福音でイエスは、「私を信じる者は、私が行う業を行うだろう。そればかりか、もっと大きなことを行うであろう。」と言いました。イエスを信じる者は、イエスが行うよりもさらに「大きな業」を行うようになる、というのです。なぜなら、「父が私の内におり、その業を行っておられるのである。私が父の内におり、父が私の内におられると、私が言うのを信じなさい。」とイエスが言っている通り、イエスを信じることは、この神とイエスとの交わりに生かされることになるからです。この交わりに迎えられるなら、「大きな業」を行う者とされるのです。「私はそんなことできない、できていない」と思うかもしれませんが。しかし、たとえばイエスの愛に動かされ、誰かに優しくしようとするとき、それはもう「業」を行なっているのです。ある人があなたと出会って、優しさを感じたなら、その人はあなたを通してイエスの、神の優しさに触れたのです。あなたの業を通してイエスに出会う、み言葉が伝わる、ということが起こる。イエスと神との交わりにあなた自身が生かされているなら、あなたを通してその交わりに人が迎え入れられる。誰かを赦そう、愛そうと大げさに構えずとも、今日一日を感謝して過ごそう、クリスチャンとして目の前の人との交わりを大切に生きよう、イエスの愛によって生きようとする日々の営みの中でなされる一つ一つが、「業」に他ならないのです。

たしかに、その一つ一つは小さなものかもしれませんが。しかし、かつて地中海地方の小さなクリスチャンの群れでなされた小さな「業」が、2000年後の今、世界中に伝播し、大きな「業」となっているのです。この現実を目を向けるとき、イエスがおっしゃったことが「本当だ」と頷かずにいられません。私たちはこの闇が支配しているようにすら感じられる世界のなかで、また、心騒ぐ日常のなかであっても、イエスを信じ、その道において愛と赦しに与るなら、力が与えられるのです。そして、その力によって、たとえ小さくとも、闇のなかで光の業を行うことができるのです。

「わたしは道であり、真理であり、命である。」

これが、十字架に向かうイエスが弟子たちに伝えたかった言葉です。私たちの救い主は、私たちが心騒ぐことを放っておかず、イエスと神とともに「住むところ」を用意するために命を捨ててくださり、そこに至る道にまでもなったださるのです。心騒ぐこともある。どうにもならない後悔にとらわれることもある。しかし、「信じなさい」とイエスは言っています。イエスを信じ、父なる神、子なる神の交わりに迎えられ、小さくとも光の業を行う者とされ、この世界に派遣されてまいりましょう。